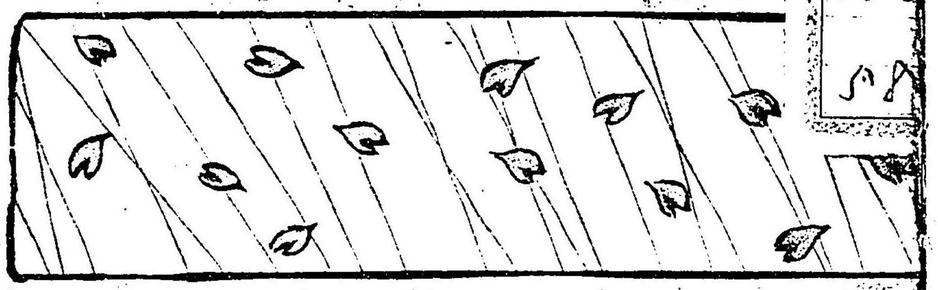


33
58

聚樂軒

飲食

小書

作料

松竹合名社の白井松次郎氏に、浪花座の初日の事で用があつて行つた時に、京都の十二月の顔見世の一番目に何か史劇様の物は無からうかとの相談を受けた、種々と筋を話したが氣に入らなかつた、それでは『ローベデヤガ』の La Estrella de Sevilla を秀次の世界へ書込んで演らして見たら何うかと、荒筋を話したが、至極善からう早速筆を執つて貰ひたいといふ事であつた、それが丁度一日の日で、二日が初日、三日、四日と芝居が多忙であつた爲め詰切つて居た、五日から七日迄僅々三日間で兎も角五幕物を書卸さうと云ふのだもの少し大仕事であつた原作のドンサンコを不破伴作にしたのと牢を喰つて大詰へ一切運こんだのとは、大森鶴雄君の智恵

を借りたので、秀吉や淀君や三成などを出したのは俳優の都合もあつたが多く脚色上日本化さゝうとした窮策である、如水を出したのは作者の道楽で作者はこんな風の男が理想なので、アイデアルの片影を出した譯なのだ、最日本化せしめる爲め、原作の妙所を割愛した所もある、性格も武士式になつている、エストレリヤの繪島は日があつたら面白く書ける性格だが急いだので實に書流しになつて仕舞つた、成べくバタの香りがしないやうに杜樣と思ふたが、それでも日本料理で出すオムレツの樣な處もあらう、都合上正史の事實を繰上げたり繰下げたり勝手氣儘な眞似をして、正史の人物をめちや〳〵にして仕舞つたのは故人に濟まぬ譯だ、時間の關係も頗る困まつたのは、秀次の方は長い時間の方が奥行があるが、何分エストレリヤの方から短かくしろとせつかれるので、こんな物になつて仕舞つた、大詰に國松を出したのも芝居式に成過ぎると笑はれるのは承知で顔見世といふものに因らはれたのだ序幕で花吹雪をつかつて、大詰に又同じ人に花吹雪をつかつたのは作者の味噌なのだが、見物の方では重なると言はれるかも知れない、臺詞は少し苦心したつもりだがこれも氣取つているとか、月並だとか云はれるかも知れない、所詮此脚本に面白い個所があつたら、それはローベデエガが豪らいので、惡い個所は悉皆作者の罪だ、稽古になつたら一冊宛此正本を渡さうといふ

ので製本や印刷を急いだ爲め校正の疎漏な處もあらう体裁の整はぬ個所もあらうか一切作者自身が其罪を着る。

この脚本の興行權は大阪脚本研究所にあるから無斷で興行されては困る。

明治四十四年十一月

生國の假寓にて　食滿南北

聚樂物語

食滿南北新作

序幕

時は文祿四年三月三日の晝より夕に至る

處は都嵐山の麓

人は

關白豐臣秀次　妹繪島
浪人增田左門　侍女初花
黑田如水孝高　千代野
栗野木工助　桐野
吉田修理の亮　さゝ
萬關彌　朝霧

遠藤八彌
堀三十郎
志摩采女

嵐山の中腹には今を盛りの櫻花、大堰川の水の流れ、さすがに春を語り顔なり、土堤には幕を打廻ぐらし、關白の御座所は一段高く設く、婀娜めかしき四邊の光景、お小性萬關彌花やかなる、桃山好みの風俗にて前髪なり、侍女初花、千代野、さゝ、桐野等に追はれて出づ。

關彌『許るされい、關屋は生來の下戸ぞ、酒まひるだけは。

初花『イヽヤ許しませぬ、上樣のお催し雛の節會の祝事、けふは女の强い日ぢや。

千代野『常は奥表の隔てはあれど、三日は雛の女夫事、上樣のお許しぞ、日頃から物云ひたいと思ふた萬樣。

さ『だうでも放さぬ、酒嫌らひなりや、たつても言はぬ、千代野殿のほこりがに立てさせらるゝ茶一つまひらぬか。

桐野『それも嫌なりや、私達と一つ舟、芹川の歌詰の橋まで、それも嫌でか。

關彌『いやといふではなけれど、上樣櫟谷のあたりへ行かせられたに、萬居いではお傍の御用がかくる。

初花『ホヽヽヽヽヽ此處を退がれやうとて、よい手な事、今日は木工助殿も堀さまもお傍に居らせらるゝ、萬樣居いでもよゐとおしやつた。

關彌『そりや誰人が。

初花『この初花が言ふた。

關彌『エ、よい加減な戯言。

初花『戯れごとでない、芹川まで下つたら、お前の見たいとおしやる、朝霧殿に逢はせうぞ

關彌『何ゝ朝霧。

千代『それ〳〵朝霧殿といや、そのやうな顔して、だうでも歌詰の橋までもどかしい皆さん手をとつて。

左右より關彌を捕へんとす、關彌櫻の木を拔ふて逃ぐる、

關彌『これはまた、わびしき事、上樣戻られたりや、お叱り受けふぞ。

初花『何のお叱りがあらう、朝霧樣といふたりや顏色かハた事情聞きたい。

關彌『誰が、さるかまひなき事にほにいでやう。

千代『それでも耻かし相にした、その事情聞かぬうちは何處へもやらぬ。

關彌『からき事を、其處退かうぞ。

さゝ『いゝや退きませぬ、朝霧樣との事情聞きたい。

なほも追ふ、朝霧出で此体を見て、

朝霧『上樣の御成ぞ。

やゝ大きく云ふ、四人の侍女これにて周章ふためきて、幕のうちへ去る、

關彌『朝霧どのか。

朝霧『萬樣。

周圍を見まはして傍近かくより、

關彌『かういふ時でなくば人目立つて話しはならぬ、大藏の局より消息にてもあつてか

朝霧『たゞ常陸殿を遠ざける手段、治部少輔樣から關彌のもとへ云送つたとの玉章。

關彌『それは計らうた、苦肉の謀事もて奧州へやつた、かくて表は關彌、奧は其方關白

の朝夕は治部少輔殿の手で殿下のお耳へ。

朝霧『この朝霧の手よりは大藏の局の口で御方樣へ。

關彌『此頃の御乱行では、聚樂の御所に逢生ふるも近いうちぞ。

朝霧『抬君の御誕生の後は、淀樣にもきつう、關白樣を嫌はせられ、殿下までも今日此

頃は。

關彌『ふう、疎ませらるゝも道理、聚樂の金藏を漫りに開らかせられ、名器名物、これ

を楽金として前野、淺野、池田、伊達の諸侯に與へらるゝも不審一ふし。

朝霧『右の大臣、菊亭樣の御息女や、さきの夫に儲けられし乙女子までも側女にして、

らうがはしき御振舞。

關彌『かくて此儘に過ごさせられては、桃山より表立つて御沙汰あるも近ひうち。

朝霧『重ひ役目のうちは、心をも押へやう、勉めた上で、桃山の御殿へ歸つたなりや、萬樣を夫と呼んでも大事ないかや。

關彌『ハテ、それは密事ぢや、さなくとも初花はじめ皆の者に嫌られた、それよりも是が露顯はれてはお互ひの大事ぞ。

朝霧『包めるだけは包みませう、が、外ならぬ此道は。

關彌『はて、それを愼まねば重い役目はつとまらぬに。

朝霧『ハイ。

密かに語らう折柄、櫟谷より立歸る關白秀次、遠藤八彌、志摩采女の両小性に增田左門が妹繪島をはさませて先に、吉田修理亮、栗野木工助及び小性堀三十郎、家臣等を隨がへ共に登場、關彌、朝霧はこれを見て驚き、朝霧は幕の内へ去る、初花等四人出で御座を設く、關白着座す、關彌にむかひ、

秀次『離の節會によい備へもの、關彌櫟谷でそなものを拾ふて來た。

關彌『ナニ、此女をお拾ひ遊ばされしとや。

秀次『ふう、幕の中を覗きし姿、繪よりも美くしう、身が心を動かした、心なき者共は無禮の振舞ぢやと左右の手を取つたを撫はつ歸つたのぢや。

關彌『幕のうちを覗がひしとは、心許るせぬ女。

秀次『イヤ〳〵女心の物珍らしう、それで覗いたのぢや、さうであらう。

繪島『ハヽハイ。

秀次『さうぢやといふているは、あれを見い、巫山の山神が雲となりし夢の面影もかうあらうか、太液の芙蓉、未央の柳、芙蓉は面の如く、柳は眉に似たりと白氏が讀みし唐詩に劣らぬ程の晴々しさ、名は何といふ。

三十郎『上樣の御意ぢや、名は何といふ。

繪島『ハイ。

三十『何といふ。

繪島『ハイ、繪島。

秀次『ナニ、繪島といふか、繪島か、よい名ぞ、身は關白ちや、今日より奉公へい。

繪島『ハヽハイ。

秀次『處は何處ぞ。

繪島『ハヽハイ。

三十『處をお問ひなさる何處ぞ。

繪島『ハヽハイ、太秦。

秀次『ナニ　太秦とか。

繪島『ハイ。

秀次『太秦の摩叱羅神を祭る神事は、偏へに百鬼夜行と聞きつるに、はれ〳〵しい繪島が顔、秦の川勝が見しといふ、桂の樹にも勝りし者、いとほしき女、もう何處へもやらぬぞ。

繪島『アヽそれは。

秀次『それはとは、外に云ひ契りし者でもあつてか。

繪島『イエ、私くしには兄者一人の外は。

秀次『兄があるといふか。

繪島『ハイ。

秀次『兄があらば其者をも召寄せう名は何といふ。

繪島『ハヽハイ。

秀次『何といふのぢや。

繪島『増田左門といふ浪人。

秀次『増田左門といふか、ふう、三十郎其方太秦へ參り、増田左門を訪ね、たゞちにこれへ召連れい。

三十『ハッ、太秦はどのあたりぞ。

繪島『木島の社の森影。

三十『木島の森かげとか。

繪島『アヽもし左門は。

三十『何んであらうともよい、上様暫し御許しを。

秀次『關白とは云はず、懇切に召連れい。

三十『ハツ。

三十郎意を帶して去る、

秀次『兄をも呼よせた、思ひわぶる事はない、近う來よ。

繪島『ねぎ事に櫟の宮へ日ひぎ參る者、だうぞ此儘堪忍して。

木工助『上様、左門の妹とのみにて素性さへ得知れぬ者、まして御幕のうちを窺がひし女、何事をも明らかになりし上ならでは、御傍へは如何、たゞ此儘にお歸しあつて。

秀次『イヽヤ、今日は女の節會ぢや、過去世よりの約束事とも思はるゝ、許せよ。

修理『さあらば修理亮、左門とやらに逢ふて巨細物語りし上貰ひうけて。

秀次『イヤ〳〵、さる呶々しき用意をも及ばぬ、繪島行かふぞ。

繪島『この上に何事をも答へいでは。

秀次『よい、それをも三十郎もて呼び迎へた、浪人とあらば召抱へやうぞ、身は關白ぢや、落葉の霜の深冬にも、雲と紛ふ花も咲かせう、青葉の露の夏山にも毬毛に似たる雪も降らさう、天地の中にありとあらゆる樣々は皆秀次の心の儘ぢや。

繪島『天地の樣々は心の儘になられやが、女一人の心をば動かす事は難づかしい。

秀次『イヽヤ、動かして見せう、數の寶をもて數の位をもて、ハヽヽヽヽヽヽ、繪嶋といふ花が咲ひては、目に馴れた櫻花もう飽きた、聚樂へ戻つて酒宴せふ、繪島來よ。

躊躇ふ繪島の手をとつて立たんとす、幕の内より、黑田孝高出で、繪島を放し秀次にむかつて座す、秀次きつと見て、

孝高かなどて此處へは。

孝高『輕々しき御振舞、かくても風に櫛づり、雨に浴して、天下の動亂を治め玉ひし、殿下のお世繼と名乘らせたまふか。

秀次『何。

孝高『女、素情さへ得知れぬ身で上様に近々と、無禮な奴、立て。

繪島喜びて立たんとす。

秀次『女まて。

繪島『エ。

又も躊躇らう。

孝高『何をたゆたひて、後日の咎め思はいでか。

繪島『ハイ。

孝高『とく去れ。

是にて機會を得、繪島鬼一口をのがれ密かに孝高を拜みて去る、秀次なほ

あきたらず見送りて孝高をハタと睨み、

秀次『子が櫻狩の場に不風流たる嵐、あたら、はにある花は散つたわ。

孝高『花は散るものぞ。

秀次『ナニ。

孝高『花は散ても春來れば咲かうに、再び咲かぬは御運の末ちや。

秀次『人の力に能ふだけは、位をも榮華をも身に集つめたる秀次を運命の末といふか

孝高『潮は滿つれば干るものぞ、月は圓やかなりし其日より再缺くる自然の天命。

秀次『ナ、、何といふ。

孝高『榮華の極み、關白の御位、聚樂の御所の塵一つだに太閤殿下の御恩惠、三好殿と

呼ばれし昔、拾ろはれし運命は自然と開く花なれど、嵐も吹くわ、雨も降るわ、

吹雪と散るは最後の榮、後は芥とひとしなみ。

秀次『關白秀次を芥といふか。

孝高『たゞ、花の譬へ。

秀次怒つて大刀とつて拔かんとす、木工助、修理亮は秀次を止め、關彌等

は孝高を圍ふ

木工『おん怒りさる事ながら、雲と見るも、霞と見るも白くあやまたるゝ花の盛り、

孝高の言上もたとへ言葉に刺あるとも、心の誠は花の香り。

修理『まして酒宴の折柄、山靈も血汐をなどて喜こばれう。

關白『只此儘の御許しを。

秀次『イヽヤならぬ、花を散せし孝高ぢや、命をも散らさうぞ。

木工『太閤殿下の御寵愛深き孝高、後日の御沙汰も如何や。

秀次『殿下は主にて秀次はあるじではないといふか。

木工『さる道理もおはさねど。

秀次『無くば退かうぞ。

なほも止むるを孝高冷やかに見て、

孝高『武士はたゞ何事の終決をも太刀に血ぬらば濟むまでと思はせられてか、太閤殿下には肥前名護屋表にて朝鮮の大軍を統べられしも昨日今日やゝ倦ませられ桃山の新らしき殿へ戻られしは、大政所の御病氣ばかりでない、拾君の御悪愛もおはさう、殿下の御跡をつがせられ肥州へ下らるれば兎も、さなくば聚樂に温たかき鴛鴦の衾も破れ申さう。

風一陣、花吹雪の如く散る、太刀もちし秀次何物にか觸し如く暫し無言、

やゝあつて。

皆々『孝高を此所へ置き一同は立て。

皆々『ハツ。

と躊躇ふ、

秀次『よい立て。

皆々『ハツ。

疑の眉をひそめて一同去る、花なほやまず散る、

秀次『孝高。

孝高『ハツ。

秀次『花は散るのう。

孝高『折からの嵐に。

秀次『吹雪のやうに散り來るわ。

孝高『流れに任かせて行衛も知らで。

秀次『末は芥ちやのう。

孝高『ハツ。

秀次『拾君は淀殿の胤のう。

孝高『さればこそ、名護屋へ下られ軍をさへ統べらるれば、再春は花を咲かせう。

秀次『ふう。

孝高『此頃の御振舞、桃山の殿下のもとへ日となく夜となく告ぐるもの、櫛の歯をひくが如く、今にして御心醜が入させられねば、關白の御位はあらぬ方へ。

秀次『ふう。

孝高『名護屋にあらせられしも久しきに絶るたまはで、桃山へら移られしこそ、天の與ふる時、取らでかなはぬ運命、即刻にも肥州へ下らるゝが何よりの手段。

秀次深き思ひに沈み、

秀次『ふう、秀次御跡を受ついで、肥州へ下らう。

孝高『孝高が言上、腑に落ちさせられてか。

秀次『桃山殿への執達は、孝高務めくれい。

孝高『ハツ。

秀次『時遲れては詮もあらじ過ぐにもつとめくれい。

孝高『ハツ、さあらば憂ひの雲もなし直ちに是れより。

秀次『歸弟をまつぞ。

孝高『ハツ御免。

孝高勇みて去る、萬關彌幕を上げて見送る、雲雀高く舞ふ聲はげし、秀次靜かに見上げて獨語す、

秀次『雲雀はたゞ空高く舞ふて、聲を限りに囀づるが天の勉めか、その囀づるも只子を養育まんとて餌を求むる聲か、伏見がりに囀づる淀といふ告天子も、拾君を巣の中に育てゝ空高かく飛ばせうとてか。

關彌靜かに出で。

關彌『上様。

秀次『誰ぢや、ふう關彌か。

關彌『ハッ

秀次『何しに參つた。

關彌『孝高が心の底の訝かしく。

秀次『何といふ。

關彌『上様名護屋へ行かせられては、聚樂の殿の宿もりは誰人が致しませう。

秀次『ふう。

關彌『大方は心あて、黑田如水、淀の御方より斯くはからへよとの内命受け、何時治さまるか期も知れぬ、朝鮮の軍奉行その統を名にようで、上様を肥州へ遠ざけまひらせ。

じつと見上ぐる、秀次またも疑ひ、心の底よりむら〳〵と起る、無理に押へて、

秀次『フ、、、、、拾君には大阪といふ宛があらう。

關彌『大阪はただ住まはせらるゝ假の御座、關白といふ御位は二たつとはおはさぬに。

秀次『秀次は太閤殿下の姪ぢや、何しに隔て心の御座さうぞ。

關彌『叔姪の御中らひも、御力の腹に宿らせたまひし拾君様と並らべられ、何れが重くいづれが輕いと思ぼさるゝ。

これにて秀次氣色俄かに變はり

秀次『オ、名護屋へは行かれぬ、關白ぢや、豐臣の天下を握る秀次ぢや、あたら雲雀の囀づりに清き耳を貸さうとした、萬、盃、盃。

關彌『ハッ。

關彌目成れるをまこび幕の内に向ひ

奥の衆、御盃を。

皆々『ハッ。

と答へて侍女朝霧をはじめ一同出づ盃を運ぶ、秀次とつて、

秀次『萬、つげい。

隅彌『ハッ。

秀次『三伏の暑さに取り上げし扇も、搖落の秋に逢ふては捨てやうとてか。

ます〳〵疑心山の如く雲の如くおこる、ッ、と干して數を重ぬ、鬱に絶へかねて、

朝霧舞ふて見せい。

朝霧『ハイ。

隅彌『上意ぞ、萬地を仕らふ。

朝霧『ハア

立上つて身づくろひす

「我本覺の都を出で、、分段同語の塵にまじはり、

隅彌『金胎兩部の一足を引捧げ。

朝霧『惡業の衆生の苦患を助すけ。

隅彌『扨又虛空に御手を上げては。

朝霧『忽苦海の煩腦をはらひ。

隅彌『衆魔降伏の正蓮のまなじりに光明を放なつて、國土を照らし、衆生を守る誓ひを顯はし、子守勝手藏王權現、同体異名の姿を見せて、おの〳〵嵐の山によぢのぼり、花に戯むれ梢にかけつて、さながらこゝも金の峰の、光りも輝く千本の櫻の。

舞の內、秀次盃の數を重ぬる、堀三十郎、增田左門をともなひ出づ、

三十『繪島が兄、增田左門上意によつて。

繪島の名を聞き、秀次夢のやうに其姿を眼に浮かべ、名に醉ひ酒に醉ひ、得知れぬ心地に左門を見て。

秀次『繪島が兄左門とは其方か。

左門『誰人よりとも云はず、たゞひたふるに供なはれた、繪島の兄と聞かるゝ御身は。

秀次『關白ぢや。

左門『ナニ。

秀次『左大臣豐臣秀次ぢや。

是を聞き答へなく行かんとす、三十郎立ふさがり、

三十『上様の御前、答辭さへ無きは無禮ぢや、戻れ。

左門『増田左門は天下の浪人、關白に呼ばるゝ男でない。

秀次『祿を與たへて召抱へやう、抱へたりや身が家臣ぢや。

左門『ほしうない。

秀次『さらば繪島に聟ども持たせう。

左門『それも嫌ぢや。

閼彌『聟と云はせらるゝは恐れ多くも上様ぢゃ。

三十『日本に二となき御位、關白殿下を聟に取るのぢや。

左門『アッハ、、、、、、金銀珠玉もて、美つくしう塗り立てた、雲をつく高樓に住めば、さまで心が高うなるか、關白とて人ぢや、浪人とて武士ぢや、位もて穢なき體をかくさうとて、錦もて曲がりし心を包もうとて、左門の眼に寫つりし影は赤裸の秀次。

秀次『ナニ。

左門『繪島は左門が大事の妹、形の聟がね得どらぬ、さらばぢや。

又行かふとす三十郎なほも止め、

三十『耳まで裂けし口を持つか、お受けせぬば座は立たさぬ。

左門『立たうと立つまいこ左門の足ぢや、祿に括られて、得踏み出ださぬ足寒へでない

三十『ナニ。

左門『笠は人空、大地は沓、行きたい處へ勝手に行く。

つか〳〵と行く、

秀次『左門まて。

左門『ナニ。

秀次怒つて小刀を拔いて打つ、左門うけとめ、

左門『用はこれか、アツハ、、、、、、。
入相の鐘かう〳〵と響き左門呵々大笑して去る。　【幕】

貳幕目

時は文祿四年三月五日の晝
處は伏見桃山の新御殿

人は

豐臣秀吉　和斯の局
石田治部少輔三成　纓庭の局
黑田如水孝高　拾君のお乳の人
淀君　女の童
大藏の局　侍女（多き程よし）

第一場

新たに建てし、桃山御殿しかも數寄を凝らせし一室、淀君は浮世繪より拔け出だした
る如き艶なる姿、大藏局、和斯局、纓庭の局等に取卷かれ、拾君はお乳の人に抱
かれ、桃山の華美風流を代表したる花やかなる侍女（多き程よし）琴を彈じつゝある
者三人

ウタ「誰がはじめし戀の道　いかなる人も踏迷ふ、長の繩手の行通ひ、四季折
々のたへせぬは、春は吉野の花櫻木や、その一ふしと待顔なる初音ゆかし

き黄鳥の梅が香をとめ青柳のうきぬの寢乱髪は何時と忘れよぞ、

大藏『拾君様のお慰み、今日は一しほ麗はしい御顔ばせ。

和期『殿下にも此上のう御慈愛、やがて大阪へ移さうと、とり〴〵の御心設け。

饗庭『拾君様と御二方の御果報を受けて殿下の御胤と生れ出させたまふた和子。

淀君『それが果報と思やるか。

三人『エ。

淀君『關白の御位は、聚樂殿の御手にある、和子は何にを宛にせう、大阪へ移りし上、攝津、河内、和泉ほどの物成にて果報いみじきものであらうか、それを思へば捨どの〻跡を慕ふて行たがまし。

大藏『これはまた、忌はしい御方の御恨み、殿下の御胤とては、たゞ一方の大事の和子御爲惡しかれとは、計らはせたまはぬに。

和期『方様には兎角のまはり氣。

淀君『まはり氣ぢや〳〵、女はかうも弱いものぞ、嫉みでもない、恨みでもない、殿下

の御胤を大事とも思へばこそ。

大藏『その御心なりや、たゞ一言殿下の御耳へ、そと囁やかせられたなりや。

淀君『さうすれば和子の幸ともならうかや。

大藏『一つの物を二人にと、思ひ惑はせらるゝ殿下、だう結がつかうども拾君様の御爲に八をも九をも當てられやう。

和期『まして聚樂様此頃の御身持では、殿下の思召もだうあらう。

饗庭『それに乘るではなけれども、和子様の爲めには此上のうもよい傳手。

大藏『大政所の御病氣とて、名護屋より歸らせられた御心のうちには、和子様の影も潛んで居やう。

和期『この殿作りもそれやこれ、今にも殿下渡らせられた上。

淀君『思の絶へぬ、うたてき世のう。

物思はし氣なり、太閤殿下女の童等に誘なはれて出づ。

女童『殿下の御渡りぞ。

これにて皆々出迎ふ、秀吉座に就く、

淀君『大政所の御病氣は、如何おはしますや、けふの程は事ごふをさへ忘たりお許し下されませう。

秀吉『よい〳〵、さしたる事ごもない、昨日今日は病も薄らぎ、床を離るゝも近いうちぢや、それは兎も和子は機嫌ようわせらるゝか。

淀君『いたいけの口に殿下を呼びまひらせてと、せがんでばかり。

秀吉『ふう、左樣か〳〵。

お乳の人が抱き來る無心に寢入る拾君の顏を目を細めて見入る秀吉當年の英雄も全く愛兒の前には何物もなし、

オ、よう寢入つたぢや、頰のあたり淀に生寫し、父に似いで母に似たるは、日本一の果報者ぞ、頓てこの紅葉のやうな手に四海を握らせうぞ。

淀君『何時、さうなります事ぢややら。

秀吉『左吉の昔より、心きゝたる治部少輔を傳ごもせうぞ、朝鮮の事治まりなば、和子をともなひ彼地へ渡り、珍らしい異國の景をも見せやうぞ。

淀君『異國の景色よりも晴れて御國の山川を、和子に見せたう思ひまする。

秀吉『何をそのやうにむつかつてぢや、晴るゝも曇るも御身が心の儘ぢやに。

淀君『關白樣は天下のお世繼、たとへこの和子が赤き唇に政事をとるやうになりましても、聚樂樣に心置き、大阪にも得居りますまい、高野の聖にたのうだ上、今のうちに得道させ、同じ世を黑う暮らさうなりや、墨染の衣の袖に思ふ色をば包ませたい。

櫻庭『御方樣の仰せ事、後の亂れを思しはかりて二葉にからう御志。

和期『たゞ殿下の御はからひ一つにて、さる憂らき思ひも晴れて、隈なき月夜とも。

大藏『まして聚樂樣此頃の御亂行、朝霧より先きの程かくの消息。

秀吉『ふう、それ見せい。

大藏『イヤ、憚かるふしもあれば。

秀吉『よい、もて。

大藏『ハッ。

消息を殿下の手に渡す、秀吉讀みもて行き、

秀吉『ふう、如水めが關白に智惠つけたとか、何事にも鋭い奴、豐臣の天下を狙ふ者あらば、江戸内府でもない、奥州の片目でもない、ふう此足蹇め、ハ、、、、、、

淀君『よいわ〳〵孝高參らば一泡ふかせうぞ、面白いわ。

秀吉『われに變つて名護屋へ行けいとすゝめた。

淀君『エ。

秀吉『如水めが智惠よ、秀次を名護屋へやり、異國にある諸將をば恩賞もて釣りし上、秀次に心を寄せさせ、除々に謀らふといふ孝高が心の底か、フ、、、、名護屋へやるまでもない、頓がて嵐に。

淀君『エ。

秀吉『イヤ嵐にさへあてぬ花、墨の袖とは忌はしい、和子は天下の跡とりぞ。

淀君『聚樂様へどうも心の置けますれば、和子に跡とりなど、は。

秀吉『何、心置く事はない、安排は心の儘ぢや、オ、、、和子よ〳〵、母はいかう難かしいのう、アッハ、、、、、、、、。

女の童出づ、

女童『お局へ申上ます。

和期『何事ぞ。

女童『治部少輔三成様、大奥へは恐れあれど、少と言上いたしたきふしありとて御許したまはるやうとの口上。

和期『殿下、お聞き遊ばしましたか。

秀吉『よい、外ならぬ治部ぢや、許すすぐにこれへ。

和期『お許しぞ、お通し申しや。

女童『ハッ。

去る、

秀吉『淀はじめ皆の者は暫し次へ。

淀君『淀はお傍に居りましても。

秀吉『いや、後にて語らう程に皆と行かれい。

淀君『參ります、常のやうに酒宴の用意整のへて。

秀吉『まつて居いよ。

淀君『ハ、ア。

淀はじめ一同去る、女の童案内して石田治部少輔三成出づ、女の童を去らしめ、殿下の傍近う進む、

秀吉『治部か。

治部『ハッ。

秀吉『急の用どもあつてか。

治部『ちと密々の言上。

秀吉『さうあらうと思ふて、女どもは遠ざけた、關白の事どもか。

治部『ハッ、御明察。

秀吉『黒田如水が名護屋へ行けいと勸めたであらう。

治部『大藏の局より既でに御耳へ届きましたか。

秀吉『その事は聞いた、其外は。

治部『太秦に住む增田左門といふ怪やしき浪人、その妹に情をかけられ、常日の如き御亂行。

秀吉『ふう、なほ其外にあつてか。

治部『この頃夜な〳〵面を覆ひて岐に出でられ、男女の嫌ひなく切り捨てらるゝと、專風說。

秀吉『ふう。

治部『殺生關白と京童の口々に夕日傾く頃よりは、聚樂近きに往來も絶へ、此程よりは西山許りまで夜更けて忍び出でらるゝと關彌が許より數の消息。

秀吉『ふう、シテ木村常陸は。

治部『密かに奥州伊達殿の許へ。

秀吉『政宗は鋭い奴ぢや、一族栗野木工助を秀次が側近く置き、密かに謀る事ありと、兼ねて心をつけ居たに、常陸を招き寄せたか。

治部『其外桀金と稱へさせられて、聚樂の御金藏を開き、勝入齋の女を妻とする、關白殿の相婿淺野幸長。

秀吉『ふう、ふう。

治部『姉君を御正室とせらるゝ池田輝政。

秀吉『ふう、ふう。

治部『此頃女を召されたる最上義光、其外重臣白江、熊谷、吉田、木村、油斷のならぬ家の子と數養なはるゝ關白殿、誰が口より誰が耳へ何事を呟やかんも計り知れぬ世の中。

秀吉『治部少。

治部『ハッ。

秀吉『海を隔てし外國より、まづ川一つ隔ちたる都の空へ事をむけねばならぬのう。

治部『詮すべも、き御謀事、叔姪の御ひらひも天下の動揺には替へ難し、斧鉞も時に要あらば。

秀吉『されど大事ぢや、名も無きに事をまうけ到つて破るゝ恐れもあるぞ。

治部『萬事治部少輔が心一つに。

秀吉『ふう、よきにはからへ、能ふべくば常陸歸らぬうちにの。

治部『ハッ。

琴の音に和して歌細く長く響く、

秀吉『琴の音に、心を靜めやうと思はゞ、一度は太刀に血ぬらでは叶はぬ世の中、治部少輔。

治部『ハッ。

秀吉『藤吉郎の昔より、長の年月血腥ぐさい風にも、もう飽いたわ。

顏見合せ、

ウハ、、、、、、。

治部『長居いたさば後日の批判、御免下しおかれませう。

秀吉『かへす〳〵も心を附けてのう。

治部『ハッ。

治部去る、黒田如水襖を開き出で、退出する治部の跡を鋭き目もて見送る

秀吉心附き、

秀吉『誰ぢゃ。

孝高『黒田孝高。

秀吉『ゆくりなく参つたのか。

孝高『治部少輔、御前と承たまはつて。

秀吉『委細は次にて殘らず聞いたの。

孝高『ハッ。

秀吉『アッハ、、、、、油斷のならぬ奴ぢや、もう關白名護屋への取なしは致すまいの

う。

孝高『一度如水を男と頼うで、殿下への御取なし、それさへ反す心の表裏、所詮六十余州は治められぬ。

秀吉『そちの目にもさう見へたか。

孝高『若し殿下いまさずして、聚楽ごのの天下なりや孝高が足蹇も役に立つて働らかうに。

秀吉『ふう、孝高左程秀吉が邪魔と思ふか。

孝高『大明國までも恐れ戰き、手出しも得せぬ太閤殿下。

この時、襖を開け淀君窺がふ、孝高顔見合せ、

御威の程が恐ろしい。

道具一轉す、

第二場

時は文祿四年三月五日の夕より夜中に至る
處は都帷子が辻
人は

不破伴作　妹　繪島
關白秀次　復面の武士（六人？）
增田左門
志摩采女
遠藤八彌　僧、町人、物賣、童、
堀三十郎　番匠、町家の女、

上嶮峨、下嶮峨、太秦、常磐、廣澤、愛宕の別れ途、帷子が辻、折から五日の宵月、五或ひは六の、町人、僧、童、番匠、町家の女、などおのがじゝ、我家へ急ぎ足に五つの辻を別れ〳〵に行過ぐる暫らくして、繪島出づ歩きながら獨語す、

島『この程は音に聞いた關白樣の惡い噂、お月樣が、かう照らして御座つても、道行く人の影も無う、往き來るさに市をなす、この帷子が辻なれど、あの常磐の杜かけて何時にない淋みしい事、思ふ殿御がなかつたなりやかうして一人は歩行るかれまい、女の心を強うするも、弱うするのも戀どやら。

四邊を見まはして恥かし氣なり、常磐の方より不破伴作、慌急だし氣に出で、繪島にあたる繪島驚ひて身を顫はす、伴作月影にすかし見て、

伴作『繪島どのか。

繪島『オヽ、伴さま。

空意せしと同時に喜びに滿ちたる、表情もて寄り添ふ、

伴作『こゝで逢はふとの約束事なれど、今宵は折が惡い、早う太秦へ歸つて。

繪島『それでは外に約束事でも。

伴作『更けたれば便宜あし、兄者の庵へ訪ねやうに、早う。

繪島『それは嫌。

伴作『エ、廻はり氣な三日の日嵐山の麓にて、上樣に逢ふてか。

繪島『ハイ、關白様の櫻狩と聞いて、貴方のお姿が若しひよつと見られうかと思ふて、櫟谷まで參りましたに、あなたには逢はれいで、關白様に見付けられ、世に恐ろしい思ひをした。

伴作『さ、それ故に、なほ難かしい、太奏と知らせられて、更けて是れへ渡らせらるゝぞ。

繪島『エ。

伴作『サ、それ故ぢや、少しも早う。

繪島『更けてとおしやれば、まだ間もあらうに。

伴作『さりとては緩過ぎた、茲に居ては永劫逢はれぬつてともならふぞ。

繪島『ア、それは嫌。

と伴作の腕に縋る、

伴作『嫌でか、嫌とあらば不肯まいで、今宵は語らで別れやう。

繪島『今宵別れたりや、何時逢はれませうや。

伴作『明日もある、また其次の日もあらう。

繪島『次の日を待つ事が、何うも心が濟みませぬ。

伴作『エ、聞き分けて、今日は兎も歸つてくれい。

繪島『ハイ。

伴作『恨らまずにな。

繪島『ハイ。

伴作『好事には障りのあるものぞ。

繪島二足三歩行き、

繪島『伴様。

伴作『エ。

繪島『關白様や世の人が、二人の外に無かつたりや、今宵も涙で別れはせぬに。

伴作『祿といふ轡もなく、武士といふ榮もなくば、月のやうに晴々しう逢ひもし語りもせうに。

左右にだん〳〵別れながら、

繪島『なんで刀をさゝしやつた。

伴作『上樣の御心までも奪ふほどに、何故はれぐしう生れたのぢや。

繪島又走りよつて、

繪島『伴樣、あなたより外の人に見て貰ふのは嫌。

伴作『サ、見せたうも無いによつて、今日は歸れといふのぢや。

繪島『ごうでも、今日は別れるのぢやな。

伴作『月にかゝる雲ぢや、花を散らす嵐ぢや、サ、聞分けて、今宵は別れやうぞ。

繪島『ハイ。

伴作『何處へも出やるな。

繪島『ハイ。

伴作『兄者が庵へ密かに訪ねやうぞ。

繪島『きつと。

伴作『語り殘した數々は、その時にいはふぞ。

繪島去る、

便なき者、ふう今宵はこの四邊は離れられぬわ。

と云ひながら去る、鹿王院の鐘聞こゆ、五日の月いつしか落ちて四邊暗し

覆面したる秀次の臣四五出でて忍ふ、增田左門網笠をきて出づ、覆面の武士物をも云はで双方より切かくる、

左門『何奴。

答へなく、白刃もて打止めんとす、右に拔け左にくゞり戰かう戰かいながら、

扨は此頃噂ある、關白が辻切か。

なほも戰ひ刀を奪つて切る、堀三十郎、志摩采女、遠藤八彌其他覆面にて出で、あとより秀次深く面をつゝみ、大刀を拔ひたる儘ひつさげて出づ、

四五の武士或は切られ、或は逃ぐ、三十郎等も亦戰かふ、三十郎後より切

らんとするを腕もて當て、其他の者一人も殘さず切り倒す、秀次苛つて切こむを渡り合ひ、

左門『何奴ぢや、名乘れい、名乘らずとも大方は知つた、殺生關白と京童に唄はる〻聚樂の秀次。

秀次『ナニ。

切り込むをくゞり抜け、

左門『聲音にて覺ねがあらう、嵐山へ引出だされた增田左門ぢや。

秀次『ヤ、繪島が兄か。

左門『繪島が兄と知つたは、正しうも關白。

秀次『ヤ。

一刀兩斷と斬下す太刀打落され小さ刀を抜いて突くをはづしながら、

左門『罪なき者を斬らさうとて太閤殿下は天下を讓らぬ、色よき女を漁らうとて、左大臣の位には上るまい、太刀抜いて物いふ加藤小西は異國にある、關白に太刀は不用ざや、猿めが草履掴んだ手でやう〳〵に握つた天下、大事に持たねば落さうぞ

增田冷笑つて去る、秀次ほとんど戰ひに疲かれて大地に座す、不破伴作松明を持ち出づ、

伴作『ヤ、上樣。

秀次『伴作かッ。

伴作『ハッ。

四邊の光景を見て、

この有樣は何事。

秀次『ふう。

伴作『日毎御諫め申せしは此處ぞ、左無くとも惡樣に淀のあたりへ訴ふる者もある、當陸殿もわせられぬに、其宿もりに吳々も申殘されし伴作、今宵も此あたりへと聞いて、先きへ參つて守り居しも、行き違ふてかくの樣、御身を誤ちのなかつしは天の守り、家の子を失なはれしも是非なき事、彼等とても我より招きし災難ぞ。

此内三十郎心づき此体を見て面目なげに悔ゆる、伴作ぢろりと見て、
堀どの此体は、云ふても詮なし、此者共の屍を人知れぬやう、な、上様はや聚樂へ。

秀次『伴作、其方の諫めを入れて、まう慎しまう。
伴作『ハッ、數ならぬ伴作が言上とみに御心取直され、この上の喜びは。
秀次『ふう、伴作其方の諫めは入れた、秀次が望みをも適へてくりやうの。
伴作『君に仕ふまつる不破伴作、何事をも辭退み申さぬ、よし齡を召されうとも。
秀次『玉の緒にも及ばぬ、いなまぬといふ誓言が見たい。
伴作『ハッ。
と大小の刄を合す、
秀次『ふう、誓言の金打、しかと見た。
伴作『して伴作に御用とは。
秀次『太秦に住む浪人、増田左門を討取つて血汐滴たる彼が頭を、予が前へもて。

伴作『エッ、
愕然として秀次を見上ぐ、
秀次『存じ居るか。
伴作『ふう。
秀次『しかと賴のうだぞ、よいの、三十郎來やれ。
足早に去る、伴作見送つてやゝ暫ばし無言、
伴作『太秦の増田左門、繪島が兄の、、、、、。
と呆然として自失す。

【幕】

三幕目

時は文祿四年三月五日の夜
處は太秦木嶋の社の片邊り
人は
増田左門　不破伴作
妹繪島

太秦木嶋の社の片邊り、細小なる閑居は増田左門が浪宅なり、門の柱を脊にして増田左門立ちながら向ふを見る、妹繪島糸を紡ぎ居る水の音聞こへて川千鳥頻りに鳴く暫らく無言、

繪島『兄さま、某處に何時までも何にして。

左門『後より追ふ者があらうと思ふて。

繪島『エ。

左門『アッパ、、、、、、嘘ぢや、川千鳥の優しい音に聞き惚れて、つひむくつけの、兄の耳にも身にも染みて。

繪島『ホ、、、、、千鳥の鳴く音がやさしいとは、兄様には似氣ないお言葉。

左門『大刀の燒刃の品さだめ、孫吳が文書のかたくなより外に哀れを知らぬ兄、不風流し者と思ふてか。

繪島『今日まで妻も持たせられず、浮世を拗ねての浪人、兄様の戀人は太刀や鎧の外にはない、都の人が歌讀めば兄様は六韜三略、都の侍衆が猿樂に耽けつたりや兄様は劍の舞、春の櫻枕の月兄様には關係がない、それがだうして千鳥といふ哀れ深い鳴音にも耳を貸さうとなされたのぢや。

左門『戀といふ味を知つた。

繪島『エ、ホ、、、、、そりや嘘ぢや。

左門『嘘でない。

繪島『嘘でなければ相手は誰れ、上嶮峨のお歌どのか、イヤ〳〵さうでもない、オヽ、梅の宮の松尾どのか。

左門『糸を紡ぐ車より胸に廻ぐる其方の思ひ妹に教へられて知つたのぢや。

繪島『エ。

左門『繪島、兄は其方に聟を取らうと思ふている。

繪島『エ。

左門『嫌でない筈の聟がねぢや。

繪島『さうしてそれは何處の人。

左門『晴れて逢ふ日は少くとも、心には日毎夜毎語らふている戀人ぢや。

繪島『そんな御方は。

左門『無いといふか、ある筈ぢやに、關白秀次に仕へまつる不破伴作といふてな。

繪島『エ。

左門『嫌やか。

繪島『エ。

左門『嫌ならば破らうに。

繪島『アレ兄さま。

左門『嫌ではないの。

繪島『ハイ。

左門『アツハヽヽヽヽヽさうあらう、聚楽に數ある小性のうち一際目立つ風流男、爲家郷が近きあたりの梅津にて讀みたりしと聞く三十一文字、咲匂ふ梅津の川の花ざかり、繪島下を心得てか。

繪島『ハイ、うつる鏡の影も曇もらず。

左門『ふう、曇らぬ鏡に化粧して、伴作と並らべたりや、咲き匂ふ花と花、雛も恥ぢて隠くれうに。

繪島『兄様。

左門『ふう。

絵島『そりや嘘ぢや。

左門『女は疑深い者のう。

絵島『では嘘ではないとや。

左門『一生の大事ぞ、嘘いふて何にせう。

絵島『でも兄様は常日頃から關白様は。

左門『サ、關白は嫌ひぢや、豐臣の天下も心に適はぬ、さればこそこの太秦に隱れ居て世を狹まふ暮らすのぢや。

絵島『それに又伴様を。

左門『サ、伴作に遺はすのぢや、關白を聟には取らぬ。

絵島『それでも關白様は、伴様が賴うだ人。

左門『ハヽヽヽヽヽ聟の主ぢや、口はさむ事もない。

絵島『さうではあらうが關白様をあるじにしては、どうやら心が置けて。

左門『よいわ、物思ふ事は無い、關白も惜い男ぞ、今の様では太閤に睨まれて何うならう知れぬ、今が大事ぢや、まだ孫七郎の昔心を寄せた事もあつた、確か天正十九の年よ、奥州九戸の戰ひに小冠者の身で采配とり見るうちに敵を散らし、其歸るさには足利學校へよつて古文旧記を齋らして歸つた程の男ぢや、秀吉を叔父に持つたが誤り、今では心も狂ふて居やう、されど心の錆ぢや、根は名作、研ぎ直せば治らぬといふ事もあるまい、江戸の家康や佐和山の三成にくらべては正直らしい秀次、聟の主と極つたなりや、伴作にもよう言はう、淀の腹に出來た子に天下をとらす程なれば、可愛い聟が主の肩持ち、この儘に關白と心から敬まはしたいわ。

此物語のうち、不破伴作網笠深く面を包み、門近くうかがい躊躇ふ、内にはそれと知らず、

絵島『らし狂ひし御心の治つたなりや兄様も伴様と一しよに、關白様に仕へてか。

左門『イヤ、左門は仕へぬ、たゞ其方と伴作といつ迄も隔心ものう睦まじうして仕へなば、兄は此儘太秦の土になつても恨みは無い。

　これを聞き伴作慾ろひて寄らふとして又も躊躇ふ、左門夜更けしに心づきいたく夜も更けた、もう寢やうぞ。

綸島『伴様と何の曇りものう、はれて妹と脊ゝゝゝゝゝ嬉しうて今宵は寢られぬ。

左門『ハ、、、、可愛奴のう、父母に別れし後は、兄を父者とも母者とも柱とも思ふて暮す其方、惡しいやうには計らはぬわ、明けなば伴作をも迎へゐうに臥床へ這入つて熟睡むがよいぞ。

綸島『かうなつたも梅宮様へ願ひをかけた驗、明けたら御禮に。

左門『ふう、梅の宮とはよう心づいた、酒解の神は、申し子の神、伴作と二人が中の子が見たいな。

綸島『アレ兄様。

左門『アッハ、、、、、。

綸島『それでは明日また氣色よいお顔を。

左門『ぶう、見もし見せもせう。

綸島『一しよには御座らいでか。

左門『虎韜の必出の卷に不審がある、今宵は少し讀まうぞ、かまひはない先きへ行けい

綸島『ハイ、夜更けぬやうに。

左門『よい。

　綸島一禮して去る、左門六韜をとりながら獨語、

錦を絡ふでも無く、珍味を膳にのぼすでもなく、玉の家にも住まさいで、兄がねぢけた心から、糸紡がせて日を送るを、恨みとも思はひで、伴作との中らひを許しやれば、あのやうに天へも登る心地して、いそ〳〵として臥床へいた今宵はどんな夢を見おらう、薄き衾に風洩りて、心は不破の關屋へ飛ばうぞ。

　言ひつゝ燈下に六韜を開き讀む、

武王太公に問ふて曰く、兵を引て深く諸侯の地に入り、敵人四に合ふて我を圍み我歸道を斷ち、我糧道を絕つ、敵人既に多く、糧食甚多く、險阻にして又固し我必らず出でんと欲せば之を爲す奈何。

伴作そつと表を明け覗がふ、左門透し見て扨はと思へど色にも出さずなほ
讀つゞく、
太公曰く、必らず出づるの道は器械を寶と爲し、勇鬪を首と爲す、審かに敵人空
虛の地無人の處を知れば以て必らず出づべし。
伴作機を見て、太刀拔いてつゝと入り正に切らんとす、油斷せぬ左門六韜
をとつて止め燈火に顏を見て驚く、
左門『ヤ伴作か。
伴作『上樣の仰ぢや、命は貰ふた。
左門『討手は其方か。
伴作『ふう。
切込伴作二合三合、左門は繪島の起き出でん事を恐れて、戰ひながら誘な
ふて表に出づ、道具一轉す、
浪居の裏、竹籔に桃、など咲きあり小川流れて小さき橋をかく浪居の窓より洩れ來る僅

かの光りに戰かふ、左門如何にしても太刀を拔かず、伴作は左門に切られんとの覺期
なれば、
伴作『武士と武士の出合ひぞ、太刀を拔けい。
左門『合手が不足ぢや。
伴作『ナニ。
又も渡り合ふ、左門妹の爲めにかくと思案定めて我から伴作の太刀の下に
肩先を切らる、
伴作『ヤ、
太刀の捨てゝ抱へ起こす左門聲高しと押へ、
左門『繪島が起きては事難かしい靜かにせい。
伴作『ふう。
袖をちいて疵口に當て、太刀の紐もてしつかと絆へ、
手がまはつた、切る氣でない許してくれい。

左門『伴作、左門は其方に討たれる心ぢや。

伴作『エッ。

左門『そちは繪島が聟。

伴作『ふう。

左門『左門の命は聟引出ぢや。

伴作『何といふ。

左門『帷子が辻にて闇なりしが關白に逢ふた、人々の爲めとも思ふて嚴しうも懲らした素より心狂るひし者、かくあるべきとは察した、何程の敵なりとも引受けて力のつゞく限り戰ふて武門の意地を立拔かうと、心ばかりは覺期した、が、たんだ一人の妹に迷ふた、それとなく不破伴作の元へ便るやう、聟がねの話しに假托へてとくとは申し聞かしたが、今日の討手が伴作とは今の先まで思はなんだ、たとへ關白の御内にて打物とつて鬼神と呼ばるゝ程の者がむかはふとも、何、左門が腕には立つまじ久しうも太刀振らねば試めすにも面白からうと心の底に微笑んだが妹の思ふ人には刀金も鈍まつた、サア首打つて功名にせい、この首にそへて妹繪島も其方に渡さう、不束な者ぢや、末長う見捨てぬやうたのうだぞ。

伴作手をとつて見上ぐ、涙をおさへて左門を抱へ、

伴作『何事をも心と齟齬した、上樣太秦がりと聞ひて、先きへ廻はりしも行違かふて事の興りし後へいた、されごまだ合手はお身と知らず、よくも不覺を取つた、これにて夜毎の乱行も、自然と止まる方便とも喜こんだは束の間ぢや、金打までして誓ふた跡、增田左門を討て首ひつ提げて歸れとは、魔王の叫びと耳に響いた、千百の世かけて誓ふた戀人、その兄者を討つ太刀は不破伴作の腰には無い、好のんで不覺をこらうとした、それさへお身に先んじられた、この上は共に死のう。

小刀に手をかくる左門しかと止め、

左門『まて、今死んで何とする。

伴作『イヤ放してくれい、兄者をうつた御詫ぢや。

左門『二人が死なば、妹繪島が一人殘る、殘つた一人は何となる。

伴作『ふう。

左門『この左門への詫は妹にしてくれい、金打して誓ふた首、關白の心を矯すよい方便

伴作『關白の濁つた心が清き血汐で洗へやうか。

左門『洗へずば洗へぬ迄、三度諫めて用ひられねば、退りぞいても恥でない。

伴作『ふう。

左門『一つの命を二つに使ふて手柄せい。

伴作『さらば繪島にも逢ふて、心ばかりの詫言せう。

左門『狼狽たか伴作、今繪島に逢ふては、女心に思ひ惑ひ、この命が役に立たぬ、關白が心の奥試めした上で妹は、生かさうと殺さうと伴作お身の心の儘ぢや。

伴作『主君といふ前に、暫し何事も預けてくれい。

左門『エ、、いつ迄物言する、うたぬか。

折柄繪島夢破ぶられて家のうちにて、

繪島『兄様〳〵。

呼ぶ聲す、

左門『ふう、妹が目醒めた、此處へ來ては水の泡ぢや、うて。

伴作なほ躊躇す、

繪島『兄様〳〵。

左門『さ、うたぬかッ。

繪島『兄様は何處へ行かしやれた。

此聲を聞き、心を定めて打ち下ろす太刀、繪島紙燭を持つて出づ、

繪島『ヤ伴様。

伴作繪島が持つ紙燭を落し首を持つて去る、繪島兄の屍を見て驚いて泣き臥す。

【幕】

四幕目

時は文祿四年三月六日の晝
處は都、聚樂御所の奥殿
人は

豐臣秀次　不破伴作
堀三十郎　萬關彌
富田知信　栗野木工助
外小性及侍女　繪島　朝霧　初花　千代野　さゝ　桐生

典故癈缺せる戰國の世を經て、天正十二の歳、秀吉前田玄以に諸家の記錄を集め造營

せしめたる聚樂第、其奥殿に關白秀次日夜の遊興、花の如き侍女及小性に取卷かせ酒盃を擧ぐ、萬關彌と朝霧とは御前近くに盤雙六を置き勝負を爭さう、三十郎等の小性衆は關彌の方に、初花等の侍女は朝霧の方に、立別かれて勝負を見る、

初花『オ、朝霧殿が勝たしやれた。

千代野『サア、約束ぢや、關彌樣か堀さま、皷うたしやるか。

さゝ『それ嫌なりや、此頃河原で噂の高ひ、歌舞御踊が所望ぢや。

桐生『萬樣は堪能と聞た、上樣、萬樣と堀樣にこゝで一さし。

秀次『ふう、面白いの、所望ぞ。

關彌『これは迷惑御望、萬、左樣な事は、のう堀殿。

堀『まだ歌舞伎踊とやら拜見いたせし事さへないに。

初『恨もうなら、褒ひ目ぞ、約束を破つても男とや。

千代『サア、朝霧どの其方樣が勝たのぢや、早うお二人に踊見せてと言はしやりませ。

朝霧『知らぬとおしやれば詮もない。

さ〻『さう弱ふては所望はならぬ、こちらが負けたりや、琴の、歌のとおしやらうに。

桐生『許す事ではない、サア、立たしやりませ。

初花等、萬、堀の手をとる、折柄、栗野木工助出づ、是にて一同靜まる、

栗野『上樣、桃山よりの御使、富田知信殿只今御着到、御表にて御對顏あらせらるゝやう。

秀次『面例ぢや是へ通せ。

栗野『ハッ。

引返し這入る、關彌朝霧と顏見合せ扨はと首肯づく、

秀次『關彌三十郎を殘し置き其余は次へ立て。

一同『ハア。

酒盃盤雙六等を持ち去る、

栗『お召換へは。

秀次『それも面倒ぢや、此儘逢はふ。

栗野木工助に共なはれて、富田知信出づ、

知信『上樣には麗はしき御氣色恐悅申上げまする。

秀次『知信久しう逢はぬの。

知信『時ぞともなく公の政事にたづさはり、暇おかず、私の消息をさへ斷ち無禮は御許し賜はるやう。

秀次『ふう、今日は太閤殿下よりの使とか。

知信『ハッ。

秀次『さらは公ぢや。

知信を上座へ、秀次下座へ下る、

御使の趣は。

知信『此程より再三再四、太閤殿下より召さるゝも、病氣とのみにて應ぜぬは、伏見を何と思ふてか、あまりの無禮、加へて大政所も重き枕に就かせらるゝに、それさへ言問はぬは、伏見をないがしろにする業と以つての外の御煩、知信直に參つて、關白の有樣をと、それ故の御使、さして御病氣の景色をも。

秀次『ふう。

知信『それはまづ取置ひて、問ふべき數々もあり、今日明日中に、正しう伏見へ御來怨あるやう、太閤殿下の御口上ぞ。

秀次聞きもて行く中、氣色變り、

秀次『知信下れ。

知信『ナニ。

秀次『予は關白ぢや、誰に召されて何地へ行かうぞ、伏見へ行かば聚樂に宿もる者もないわ。

知信『太閤殿下より直々に召されても。

秀次『病氣ぢや、關彌御見送せい、知信許せ。

三十郎栗野と共に去る。知信じつと見送つて、關彌と顔見合せ、

知信『誠のう。

關彌『御見送りを。

知信『ふう。

そつと一通の消息を渡し共に去る暫らくして、關彌戻るを栗野木工助、吉田修理亮左右より出で、

栗野『關彌、知信殿は歸られたか。

關彌『ハッ。

修理『治部殿よりの消息、受取つたの。

關彌『エッ。

栗野『上樣の御用ぢや、それ見せい。

關彌『何として左樣な。

栗野『隱さうとか、朝霧はもう捕へられたぞ。

修理『朝霧は大藏の局、其方は治部よりの間者であらう。

關彌『ハ、、、、、朝霧は朝霧、關彌は關彌、何のつゞきもないに。

栗野『無いといふか、男らしうもない、何事も明さいでか。

關彌『今更に何を明かさう。

修理『申さぬな。

關彌『申さうにも事がない。

修理『さらば大藏よりの消息讀み上げうか。

關彌『讀んだりとて、聞いたりとて、關彌は關係のない事ぢや。

栗野『言はぬとは言はさいでか。

關彌『よし聞者であらうとも、露顯れたりや物言はぬ男、所詮關彌は末ぢや、責問ふて何にせうとや、關白殿下此頃の御氣色　天下の御主とは申されぬ、遠からず聚樂の殿は逢生の宿ぞ。

秀次襖を開き聞く、此時つか〳〵と出づ、

栗野『上様。

秀次『關彌には直様に問ふ事のよしがある其方どもは遠慮せい。

修理『おぼめかしき男、一人置いては。

秀次『よい立て。

二人『ハッ。

一禮して去る、

秀次『關彌近う來よ。

關彌『ハッ。

秀次『治部少輔ほどの男、身が手につけば面白い事もせう、幸其方中人ともなり、予が心を傳へくれい。

關彌『石田殿は左吉の昔、太閤殿下に拾ろはれし御高恩、所詮上様御心には。

秀次『隨がはぬといふか。

關彌『治部少輔とて武士の面目を思ひなば。

秀次『何時迄も、秀次の隙を窺はほふとや。

關彌『御愼のなき限りは。

秀次『ふう、さらば治部に是を見せい。

關彌『なに、治部少輔に。
近よらんとするを扨打に切下る折柄不破伴作出仕して此体を見てつか〳〵
と寄り太刀の血を拭ひ秀次を見上ぐる、
伴作『治部少輔よりの隱目附、それと御察しあつて斯く御手づからの御成敗か。
秀次『關彌は主を賣つた、闇き身をもて明かるきへ出でし故、身を亡ぼしたのぢや。
伴作『ます〳〵深みへ入らせられた。
秀次『ナニ。
伴作『露顯れずば何時迄も隱目附、露顯はれて討たるゝとも、太閤殿下の御寵臣、故なくて成敗と兩天坪の治部が腹黑。
秀次『關彌は秀次が家臣、成敗するに何の支へがあらう。
伴作や〻獨語の如く、
伴作『登らんとする運命には、數々の支へも妨害はせぬ、されど下らんとする運命には聊かの支へさへ事を誤る大事ともならう。

秀次『伴作運命を呼ばうより、帷子が辻にて、予への約束、家土產を見やうぞ。
伴作靜かに首桶を置き開く、中に左門の首ある秀次心快げに見て、
ふう、心よう討つたな、昨日は此唇もてさん〴〵に罵しつたの、予は秀次ぞ、
口明けい、物言へい、フハ〻〻〻〻〻、もう、閉たる口は開かぬか、塞ぎし眼には、關白の面ざしさへ見られ得ぬか、我前に戈をむくるものは、左門とて關彌とて、かく物言はぬ屍となるのぢや、フハ〻〻〻〻〻〻。
伴作『上樣。
秀次『何ぢや。
伴作『左門が最後の口より上樣への傳言。
秀次『エヽ聞きたうない。
伴作『言はで叶ばぬ事、伏見と聚樂の間その道は近しとはいへ、御間柄ます〳〵遠く隔たりて、朝に流言、夕に飛語、たゞ心にかゝるは民心の向背、殺生關白と京童の口々に唄はれたまふは、萬臆の大軍より猶恐ろしき大敵ぞ、さなくとも大閤殿

下の恩顧をのみ、思ひはかりて鼻息を窺ひ、上様の朝夕を惡様に讒言、それのみならず、去る御方の一の位を望まれて春深き夜、人知れぬ几帳の影、朱き唇もて密やかに、叩やかるゝ、布衣より出でて天下をば、掌握されし太閤殿下も、凡情は押へ得ぬ、御胤の愛つくしみに、天下の大事を二に置いて、聚樂あたりに事あれかしと、忍びを入れ、腹心に謀り、探りたまふを此方より、數の餌を與へたまへば、これよそれよと呶々たち、奥州の伊達殿と、心を合して伏見を攻むると、或物は訴ふる、誰は太閤殿下を人知れず、失なはんと謀り、浪人を伏見に忍ばせ、捕へられし懐中より、關白よりの御教書ありとの、くれがしは用もなきに武器を貯はへ士卒を多くし、密かに諸將に神文誓書を書かせしの、某は朝鮮より歸りをまつて事を擧くるの、或は乱行を申立て、或物は私の恨みを訴へ、東西南北四夷上下、皆敵ならぬ處もなし、さる危きに座したまひ、盃を手にせられ、春に醉ひ、花を追ひ、罪なきに殺戮なし、御側女をともなひ叡山に登られ、或時は高樓より、鐵砲持て行人を惱まし、夜毎に出でて人を切り、御乱行ます〳〵募の

らせらるれば、彼方に張りし狐罠に、我から落入る愚かしさ、只一つの道は、朝鮮の事未だ治まらぬこそ、こよのうも幸福、常陸の亮歸落をまつて、宿もりを仰つけられ、彼國へ渡りし上、暫し伏見の戈先を避け、二つには太閤殿下の御氣色とり、在韓の諸將にも、人知れず恩惠を加へられなば、御歸朝の上、聚樂の御所に、再ひ春はめぐり來う、左右無くば此時機如何やうにも、詮すべなし、御賢慮如何御座りませう。

涙を流し、面を犯して諫む、

秀次『すでに黒田孝高に謀かられて、名護屋まで行かふとした、流言飛語は恐るゝに足らぬ、戈をもて向はゞ鋤をもて報ふるまでちや、治部少輔等が讒言を恐れて、海を隔てし異國へ、花を捨てゝ得行かぬわ。

伴作『彼方の戈は天下を擧げ、其力強く、其手は巨きく、所詮此方の鋤は及よばず、よし、力互角なりとも、大閤殿下の御手より、讓り受けたる一の位、彼方に名あつて此方に無し、名分明らかならざれば、戰ふにも不利ならむ、唯御心一つにて、

挽回すべき御運命、御賢慮の如何によつては、猶しも期を早むる道理。

秀次『エ、まだ申さうとか、もう聞かぬわ。

伴作『ハツ。

秀次『疾く立て。

伴作『今一度御思慮めぐらされて。

秀次『無禮な奴諄いわ。

伴作『ハツ。

反す言葉も無く伏く運命に泣く、堀三十郎出で、

堀『上様。

秀次『二十郎か何事ぞ。

堀『太秦の繪島處の代官もて、この三十郎にまで申入れ、上様に直々御訴訟の筋ありとて。

これを聞き秀次伴作共に驚く、

秀次『ナニ、繪島が來たとか。

伴作『ふう。

秀次『夢にだに忘れ得ぬ名ぢや、訴訟と申したか。

堀『ハツ。

秀次『予に直きに逢はふと申すか。

堀『ハツ。

秀次『許す、呼べ。

堀『ハツ。

堀三十郎去る　伴作深き思ひにしずむ、

秀次『伴作。

伴作『ハツ。

秀次『左門が首、日の岡にて梟木にかけい。

伴作『ナニ、梟木とか、ハツ。

立たんとす秀次考へ、

秀次『まて。

伴作『ハッ。

秀次『かけずともよい、繪島が參ひるのぢや、よい懇に葬むつてとらせい。

伴作『ハッ。

伴作首桶をとつて、繪島に心殘して去る、三十郎繪島をともなひ出づ、

秀次『オ、、繪島か、近う來よ。

堀『上樣のお許しぞ、進め。

繪島『ハイ。

秀次『けふは一しほ麗はしいのう、ふう三十郎より聞いた、訴訟があるとか、聞かうぞ何事をもかなへやうぞ、うたへとは何ぢや。

繪島『ハイ。

堀『溫かき御上意ぢや、申上げい。

繪島『兄の敵がうちたさに、御許がたまはりたうて。

秀次『ナニ、兄の仇がうちたいとか。

秀次、三十郎と顏見合せ何事をか心に首肯き、

堀『兄とは此程嵐山へともなひし增田左門の事か。

繪島『ハイ。

秀次『ふう、して仇とは誰人ぢや。

繪島『ハア、、、。

繪島絕ゑ兼ねて泣臥す、

秀次『泣いては知れぬ、名を云へい、正しう打たする、心を靜めて申せ。

繪島『ハハハイ。

秀次『其弱さにて仇をうたるゝと思ふか、しかと言へい。

繪島『上樣の御內人に不破伴作殿と名乘らせらるゝ御方お在しませうや。

秀次『ある、その伴作がだう致した。

繪島『その伴作殿こそ兄の仇。

秀次『何といふ。

繪島『兄の屍體の疵口にまきたる衣の片袖は、正しうも伴様の。

堀『ふう、扨は片袖の模様に見覺あつてか。

繪島『ヱ、その衣の裏に明白と、不破伴作と讀まれました。

秀次『伴作は大事の家人、女風情に命はやれぬ。

繪島『ヱ。

秀次『されど、されど、散る花に情があらば、流るゝ水にも志があらう。

繪島『どのやうな事ぢややら。

秀次『大事の家の子を與へるのぢや、代が無うては何にとものう。

繪島『しろとおしやるは。

秀次『かはりぢや。

繪島『その代とは。

秀次『望みがある。

繪島『兄は浪人、糸紡いで其日を送るもの、黄金とては。

秀次『ハ、、、、、、天下の寶は悉く秀次の物ぢや、黄金ではない、黄金に勝る寶、

繪島其方が所望ぢや。

繪島『兄の仇をうちました上は。

秀次『ふう、仕へてくれうか。

繪島『ハイ。

此時襖をあけ伴作そつと窺ふ、繪島見て、

繪島『伴様か。

伴作襖をハタとさす、

秀次『ふう。

秀次鋭どき眼もて繪島を見る、繪島深く心に覺悟す、三十郎秀次と顔見合す。

【幕】

大詰

時は文祿四年三月八日の朝より夕暮
處は都聚樂御殿の渡殿
人は

關白秀次　繪島
不破伴作　香藏主
堀三十郎
石田三成　初花
増田長盛　桐生
栗野木工助　さ
吉田修理亮　千代野
木村常陸介
國松君
富田知信　十三歳より七歳に至る
小性大勢

聚樂第の池に面せる渡殿、橋を經し此殿へ通ふべく造らる、香藏主、初花等に手を曳かれ出づ、秀次三十郎に太刀もたせ出で。

秀次『尼、ようお來やつたの。

香藏主『和子か、ホ、、、、、、、今では關白様、まだ六歳や七歳のやうに思はれてホ、、、、、。

秀次『久しう逢はぬ中、聲音までが變つたのう。

香藏『上様、もうよる歳ぞ、額には波、腰には弓、上様や殿下のお顔を、見まひらす長うはない。

秀次『イヤ、さうで無い、中々に健康ぞや、百といふ齡をも重ねやうぞ。

香藏『うたてき事のう、それで無うても此耳に、上様お側の衆を暫しの中、遠ざけてな

秀次『ふう、立て。

一同『パッ。

一同去る、香藏主秀次の顏を染々と詠め涙をおさへ袂ねて、

香藏『上樣、孫七郎どのの昔に歸つて、尼に和子と呼ばせてはたもらぬか。

秀次『ふう、懷かしいのう、母者瑞龍院どのの御顏せが、目の先きへ浮かんで來た。

香藏『和子。

秀次『大きひ聲のう。

香藏『母御前の顏が、和子の目に寫るとや。

秀次『尼に逢ふて、孫七郎の昔にかへつた。

香藏『昔にかへつた三好どの、關白といふ榮華の夢は、もう醒めさせられたか。

秀次『何といふ。

香藏『和子、大閤殿下の御血のかゝつたは、今の拾君樣は別にして、和子の外には一人も無い、何の殿下が憎ませられう、此頃の惡い噂さ、和子なかれかしと思ふのは言はでも知れた方々ばかり、和子さへ御身溫順うして居られたら、何んで聚樂に

事があらう、太閤殿下には此尼が殘り少なひ命にかへても、きつと辯疏せう程に暴言ばかり言はいで御身溫順うなつたがよい、ホ、、、、、、、、もう二十九にも成らせられたに、まだ昔の和子のやうに思ふて、堪忍してホゝゝゝゝ。

秀次『尼、關白とは名ばかりぞ、天下の事何一つ、心の儘にならぬ秀次、たゞ聚樂にあるうちは露ばかりの我儘、そも長久手の戰に先鋒を承まはつた世來、鎧では西に走り鞍置ひては、東に駈り、律令の書を金澤に得、足利の學舍よりは古文を齋らし、何一つとして太閤の御爲、ようしかれとのみ謀かりしに、淀の方召されてよりは、愛しみ彼方へ移り、秀次を忘れさせたまふて、治部如きが叩やきに耳を貸さうとなさるゝは、此上もなき御恨み。

香藏『和子、それは嫉みぞ、それは僻みぞ。

秀次『かうされては僻まいでか、かう同けられては嫉まいでか。

香藏『むつからせたまふな　拾君樣はまだお三歳だう爲されうこと十年ほどは。

秀次『秀次にも國松といふ胤はある、大空に二つの日はない。

香藏『さう片意地ではなほ悪い、尼が頼みぞ親しう逢はせらるれば叔父御、姪御、中間を隔つる垣根は無い。

秀次『尼、伏見にてはもう其方までも、此秀次を釣る餌にしたか。

香藏『暫し見ぬ中、かう迄も僻ませられてか、どうでも伏見へは、わせられぬか。

秀次『行かぬ、行つたら手段に乗るばかりぢや。

香藏『もう力には及ばぬ。

此時石田等と約せし鐘の音聞こゆ、

オ　刻限ぢや。

秀次『ナニ。

香藏『和子、もう此世では逢はれぬ、おさらばぢや。

尼、涙をのんで去る、秀次見送つて、

秀次『たゞ縋かの途を、伏見まで釣らうとして尼までも使ふたかフ〳〵〳〵。

この時泉水の後より十三歳を頭に六或は七の小性逃げて出る、十五歳位の

小性の脊に負はれたる國松君、

國松『敵はあの池を廻つて逃げた、鹿毛馳しれよ。

大將の眞似びして小性を追ふ、この体を秀次見て、

秀次『國殿か。

國松『ヤア父上。

秀次『國が戰の大將か。

國松『敵は弱い、追ふ所を見て。

秀次『ふう。

國松なほも小性を追ふて去る、

唯世の中に心からの味方といふは、あの愛氣な小さき物よりは。

堀三十郎出で、

堀『上樣、不意に太閤殿下よりの御使者到來、

秀次『ナニ、桃山よりの使とか、誰が參つたのぢや。

堀『石田治部少輔三成を御名代として、副使には増田長盛、富田知信。

秀次『ナニ、治部奴か、ふう。

栗野木工助、吉田修理亮案内して、石田三成、増田長盛、富田知信出づ、

三成『秀次公、これに在せられたか、大閤殿下の御名代石田治部少輔三成。

長盛『副役増田侍従長盛。

知信『仝副役富田信濃守知信。

三成『御名代ぢや、上座は許されい。

ずつと通る、秀次口惜氣にひかゆる、

御不審の一々、云解かるゝか。

秀次『何事ぞ。

三成『萬關彌をあらけなき成敗は故ありてか。

秀次『ハヽヽヽヽ、御身よりの隱目附、命を斷つたが何とした。

三成『中さば大閤殿下より、御乱行まもりの御使。

秀次『どうあらうとも、身が内人ぢや。

長盛『夜毎岐へ出でさせられ、罪なきを殺さるゝは。

秀次『予は關白ぢや、四海の民は悉く身が心の儘ぞ。

知信『狩くら毎に兵器を集め不慮に備ふる御志は。

秀次『治にあつて乱を忘れぬ武士の覺期ぞ。

三成『延暦の昔しより、女を許さゞる叡山に御側女を召連れられ、しかも南光坊に鳥獸の屍肉を喰ひ、僧の坊に魚鳥の骨を投げしと數の訴へ、佛罰は思されぬか。

秀次『秀次は常人でない、一の位ぢやさる些少な事に。

三成『もう關白の御位でない。

秀次『何。

三成『香藏主ごのは最後の御使、尼の言葉すら用ひぬとあらば、關白の職を罷めよとの台命ぢや。

秀次『エッ。

三成『三成敬語を斷つぞ、秀次。

秀次『ナニ。

三成『一の位にあらねば聚樂に止まる事は許さぬ、僧興山を供なふた、急ぎ高野青嵐寺へ登り、御沙汰を待てい。

堀『すりや上樣を。

秀次『高野の山へ。

三成『自招かれたのぢや。

秀次『治部少輔。

三成『治部でない、御名代ぢや。

秀次『ふむ。

三成『太閤殿下の台命ぢやぞ。

廊下の外にて木村常陸介、

常陸『御名代またせられい。

三成『ナニ。

常陸の介早卒として出づ、

秀次『ふう、常陸介か。

常陸『ハッ。

秀次『秀次が武運の末ぢや。

常陸『叔姪の御中らひ、かく迅雷、疾風とは思はさりしに、御名代といふ表を取置き、治部少輔殿に常陸介私の御願ひ。

三成『何事ぞ。

常陸『久ノぶりの御拜謁、御覺悟をも勵めまひらせたし、かつは跡々の計らひをも承たまはりたく、暫しの内常陸介に。

三成『預けいか。

常陸『ハッ。

三成『ふう、私の交も人より深き常陸介、御名代でない、治部少輔がお預け申さうぞ

常陸『ハッ、深き御憐み忝じけなし、三十郎、各々、心もうけ、よしなに。

三人『ハッ。

常陸『御案内を。

三人『ハッ。

三成『常陸介。

常陸『ハッ。

三成『余事の叮は成らぬぞ。

常陸『ハッ。

一同去る、

上様。

秀次『常陸。

常陸『もう、何事をも言上せぬ、今一足早く歸洛し香藏主に逢ひしならば、イヤそれも天命ぢや、たゞ斯くあらんと覺悟いたせしより、奥州へ下つて、そこ伊達殿の御耳を驚ろかせしも、もう十日の菊ぞ、たゞ此上は何事をも深く慎しませたまひ、高野へ登られ御落飾を。

秀次『秀次に剃髪せいといふか。

常陸『太閤殿下に敵意なきを示させたまひ、せめて國松君に御跡をば。

秀次『ふう。

常陸『常陸介かくて物言ふ限りは、治部の我儘にはさせぬ、御落飾と申すも御身を全たふする一つの方便。

秀次『ふう、髪をおろさう。

常陸『たとへ如何様な儀興るとも、輕々しう御命を縮めさせたまふな。

秀次『よい。

常陸『たとへ剃髪さるればとて、たとへ高野へ上られうとて、御命さへましまさば、明日の風は北ともならう、今日の晴は雨ともならう、太閤殿下の御命數も、な。

秀次『ふう、命を大事にせうぞ。

常陸『常陸もむざと死に申さぬ。
双方顔見合はせ、心の中に何事をか首肯あふ、折柄三十郎出で、
堀『治部少輔どのゝせかせらるゝに。
常陸『ふう、御心静かに、御用意を。
秀次『ふう、常陸まひれ。
常陸『ハッ。
静かに去る、風一陣、鐘かう〳〵と聞こゆ、不破伴作池の後より出づ、深き思ひに秀次を見送る、繪島懐刀をとつて後より、
繪島『この上の仇。
と切附くるを、かいくゞりきつと見て、
伴作『ヤ、繪島か。
繪島『ハイ。
と懐刀を捨て、大地に座す、

伴作『サ、討て、不破伴作は兄者の仇ぢや、サ討て、討たぬか。
繪島『伴様。
伴作『ふう。
繪島『二人の中を忘れてか。
伴作『イヽヤ忘れぬ、彌勒の世かけて變らぬ約束。
繪島『なんで左門を討たしやつた。
伴作『戀といふ美くしい情ひも、忠といふ清き心に破らで叶はぬ時機が來たのぢや。
繪島『エ、戀より忠が重いとや。
伴作『女には忠よりは戀が重からうされど　男には戀よりは忠が重いわ
繪島『エ。
伴作『其方とて戀を捨てゝ兄の友に就かねばならぬに。
伴作『さァもう戀は捨てゝ、兄の仇を討たうぞ。
繪島『イヽヤ捨てぬ、いつ迄も伴様は。

伴作『それでは泉下の兄者に濟むか。

繪島『エ。

伴作『討て、サア討て、討たねば妹の友が立たぬぞ。

繪島『ハイ、討ちまする。

伴作『ふう、それでこそ増田左門が妹ぢや。

繪島『討つて兄に手向ませう。

落ちたる懷刀を取りじつと伴作を見て、

兄の仇。

と自己れの乳の下を突く、伴作驚き抱き起こし、

伴作『繪島、繪島、己れと命を落しても、伴作の身に當つる、及はないといふのか。

繪島『ハイ、仇を討たぬ申譯けは、あの世で言はふ。

引廻はさうとする。

伴作『さて、上樣は高野へ登らせらるゝ、關白の御位は嵐に散つた、所詮冥府への魁

ぢや、繪島まで、ともに行かふぞ。

繪島『エ、それでは貴方も。

伴作『兄御に逢ふて運命を語らふ、まて。

太刀を拔いて腹に突立てる、

繪島『伴樣。

伴作『繪島。

繪島『うれしい。

伴作『悲くの人は寂むしう一人行くものを、二人で行くはこよのうも幸福ぞ。

二人手を取つて寂しく笑み、落人る、秀次髪を下ろしツカ〳〵と椽端へ出て、涙を浮べ無言、家臣一同平伏す、國松、走り出で、

國松『父上、何處へ行かせらるゝ。

秀次『ヲヽ、國殿か。

國松『何處へ。

秀次『高野へ行く。

國松『高野とは、都のやうに賑はしい處かの。

秀次『賑はしいとも、朝な夕なに佛法僧といふ鳥が鳴く。

國松『ふゝ、どんな聲をして。

秀次『運命といふて。

國松『妙な聲のう。

秀次『妙な聲ぢや、春來れば花は咲く、秋來れば實が成る、花は咲ひても嵐がある、木の實が成つても虫に落つる、自然ぢや、よし人の力にその幾分は換へ得られても終には天の運命に隨がひ、人は死ぬのぢや。

國松『死にますかや。

秀次『國殿、御身はまだ苔ぢや、咲かぬ花ぢや。

國松『咲きますかや。

秀次『咲くも咲かぬも運命ぢや。

國松『ア、それでは運命とは花の事かや。

秀次『ふう、さうぢや。

國松『あの花も。

秀次『國殿、池の水際に立てる櫻吹雪のやうに散る、花が散る、オ、運命が散るわ。常陸介靜かに出で、見下して二人の屍を見てふつと驚き、見上ぐ、秀次切つたる髪を出して常陸に渡す、常陸受取つて運命を自覺す花頻りに散つて鐘いん〳〵と響き、

【幕】

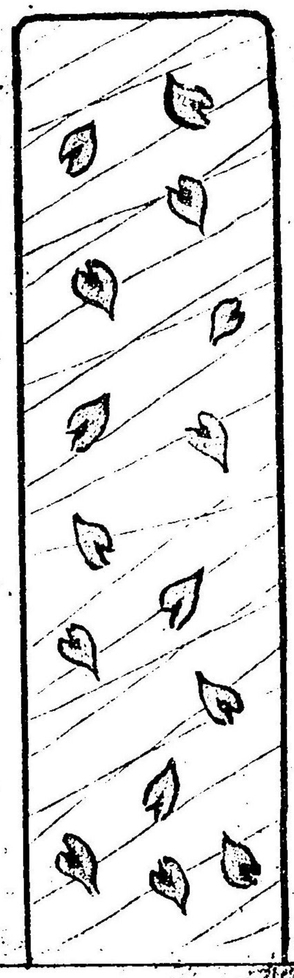
388
50

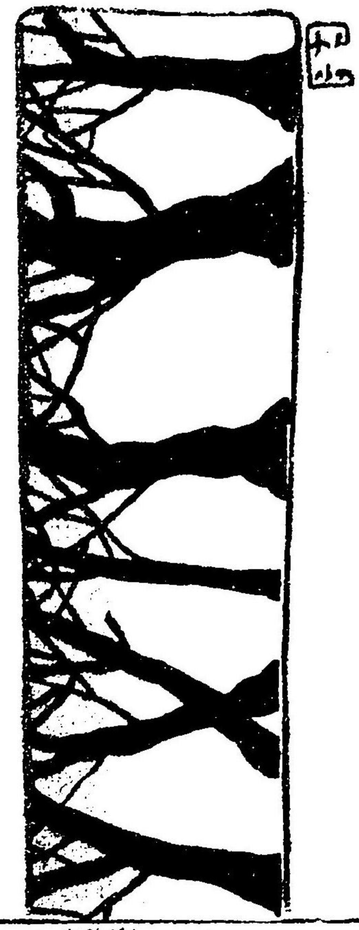
明治四拾四年拾貳月　二日印刷
明治四拾四年拾貳月　五日發行

不許複製

著者　食滿貞二
大阪市北區曾根崎中二丁目一九五[illegible]二

發行兼印刷者　山森三九郎
大阪市南區横堀七丁目廿番地
印刷所　松竹合名社印刷部天龍舘
發行所　大阪脚本研究所





338
50

338
58

088592-000-9

338-58

聚楽物語

食満　南北／著

M44

DBJ-0251

338
58